

ロンドンにいたあの頃

佐鳥 春美

再婚後はじめて夫と二人でロンドンを訪れました。ロンドンは夫も過去に幾度となく仕事で行き来したことがあるそうです。今回の滞在先にはサウスケンジントンにあるホリデーフラットを予約しました。ホリデーフラットとは長期滞在者向けの家具つき宿泊施設のことで、前夜遅くフラットに到着、翌朝パティオのガラス扉の向こうを眺めながら朝食をとっていると、遠くの方に師走の冷たい風を受けながら大きく翻るユニオンジャックが目に入りました。目覚めたばかりの私は一瞬混乱し、自分が今ロンドンに居ることを慌てて再確認したりするのです。昨夜の雨はすっかり上がり、教会の塔は眩しいほどの朝陽にキラキラと輝いていました。あまりにも長期にわたり現実的な日常生活を送った英国は外国でありながら外国でなく、いまさらエトランゼの気分にはなれそうもないのです。到着早々銀行関係の処理、旧友との再会、娘たちの蓄積された不満を聞くに至り、その娘たちの脇では突如ステップファーザーとしての任務を押し付けられた夫が一人困った顔をしていました。ホリデーフラットでの生活はさらに洗濯、掃除、買い物などの家事に追われ、昔と変わらぬロンドンの日常生活が戻ってきたかのようでした。

ある朝、博物館巡りに出かけた夫を見送り、静まり返ったフラットで一人ガラス窓に映るロンドンの冬空をぼんやりと眺めていました。そしてかつてこんな日が巡ってくるとは夢にも思ってもみなかったことに運命の不思議さを感じるのです。諸行無常の波に揺られ、今こんなふうにして若干メンバーチェンジしたご一行が、ファミリーという名の運命共同体の

船に改めて乗船したかのようでした。いつしか私の胸に今昔の感が果てしなく満ち溢れ、遠い日の思い出が徐々に蘇ってくるのです。

当時英国人の夫と離婚した私は一人ロンドンブリッジからタワーブリッジを眺めていました。シングルマザーとしての旅立ちは自分の人生を再構築することでもありました。ロンドンの流れ行く雲を見ながら「人生はチャレンジ」だと思ったら、不安の中で少しの勇気が湧いてきました。好景気の追い風もあり仕事は直ぐ見つかりましたが、子育てによる10年のブランクで、世の中はそろばんとタイプライターからパソコンの世界に完全移行していたのです。幸運なことに最初の会社でパソコンのコースを一通り受講させてくれました。お陰でパソコン業務はすぐにできるようになりました。ある日その会社の社長が「シティーで花形になるには秘書業務だけではなく会計のスキルもあったほうがいいよ」と話してくれました。私は中高一貫の商業学校へ通いましたが、6年間毎日毎日会計実務の勉強にホトホト嫌気がさし、大学は好きな英文学を勉強しました。新卒で入った伊藤忠商事も経理総括に配属されたことに失望、短期間で辞めています。しかしシングルマザーとなった今会計のスキルは武器であることを知りました。そして近所に住む英国人女性、ペギーが子供達の学校のお迎えをはじめ、私が仕事から戻るまで自宅で子供達の面倒をみってくれることになったのを機に、パートでなくフルタイムで働く決心をしました。丁度エージェントから野村アセットマネジメントと言う会社の会計の仕事のオファーがあり、直ちに引き受けることにしました。入社当時会社は

セントポール寺院近くの総勢12人ぐらいの小規模のオフィスでしたが、知らない間に会社は大きく成長、スタッフ数も100人近くに膨れ上がっていました。主計業務もグローバル化し複雑多岐になっていき、いつしか仕事に忙殺される日々を送るようになっていました。そして次第に退社時刻は遅くなりブラックキャブで帰る日も増えていきました。会社を出ると近くにオフライセンス(いわゆる酒屋)があり、キャブに乗り込む前にお気に入りのベルギーのビール”ステラ”をよく買い込みました。そのうち私が現れると馴染みになったその店のインド人のお兄ちゃんが、新妻の優しさで黙って私にステラを手渡す程になっていました。キャブに乗り、疲れた体をバックシートに深々と沈み込ませ、ステラの蓋をプッシュと開けると一日が終わりました。キャブは夜ふけのロンドンの街を走り赤信号で止まります。ステラ片手にキャブの窓からふと上を見上げると丁度人家の二階窓が見え、そのカーテンから優しい灯りが漏れていました。「あのカーテンの奥のラブストーリーを私は知らない」。そう思うと孤独が微かな痛みを伴って体の中を走り抜けて行きました。ステラの冷たい缶にそっと頬をあて軽く閉じた目をまた開けるとロンドンの闇を照らす白い月明りの下、信号はにわかに青に変わりキャブは再び走り出しました。ロンドンの金融街、シティでのキャリアは12年目にして突然東京に住む両親からの介護要請により終止符が打たれました。しかし当時次女も大学生になっていたのも迷うことなく帰国の選択をしました。仕事を通じて多くの友人ができました。又長い間英国の文化、人々の中で暮らした日々の思い出は今でも私の大切な宝物です。相手を尊重しながら自分の意見をはっきり述べる術も学びました。又人生は個を確立し、良きパートナーと喜びを分かち合うもの、そして人

生は心から楽しむものだというアイデアも知りました。そして日が巡り今こんな風にあの日知らなかった人と再び小雨降るロンドンの街を肩を寄せ合い歩く。そして傘の下で微笑みを交わすたび、あの日冷たく感じた雨粒は今は天から降り注ぐ甘露のようにさえ感じるのです。

今回のロンドン滞在中、一家でパリへ小旅行もしました。小雨煙るパリの街を歩くうち、見知らぬ美術館にたどり着きました。歩き疲れて美術館の表に出ると、そこはパリの空の下静かに流れるセーヌの辺でした。それから暫くすると金色の夕陽が雨上がりのパリの街に降り注いだので、遠くのエッフェル塔は黒いシルエットとなって目の前に現れ、それは今まで見たどの名画より魅力的ですっかり心を奪われてしまいました。



ロンドンのパブにて

(会員 佐鳥聡夫氏 夫人/元 Nomura Asset Management UK/Accountant)